

## 高見順の南方行と《文学非力説》

河田, 和子  
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/4494444>

---

出版情報：比較社会文化研究. 3, pp.11-21, 1998-02. 九州大学大学院比較社会文化研究科  
バージョン：  
権利関係：



## 高見順の南方行と《文学非力説》

河田 和子

### 一、高見の戦争認識

高見順は、昭和一六年一月下旬から、蘭印（蘭領東印度）のジャワ・バリ島（現在のインドネシア）を挿絵画家の三雲祥之助とともに旅行し、帰国後、日記、小説やエッセイなどを発表する。七月、『新潮』に「文学非力説」を発表、尾崎士郎らと議論となつて、さらに「再び文学非力説に就いて」（昭和一六年一〇月『知性』）と「現状への直言」（昭和一六年一月『文芸』）を書く（この一連のエッセイは、平野謙編『現代日本文学論争史』の《文学非力説論争》の項に入れられている。これらは、「大東亜戦争」勃発前の緊迫した時期に発表されたこともあり、高見の戦時下のスタンスを知る上で注目されてきたものである。

戦後、高見の《文学非力説》は、「右からの政治的圧力に抵抗し」、「プロレタリア文学時代の政治主義批判に呼応する、戦時下の文学擁護論」（本多秋五「高見順『解説』」『高見順文学全集第六巻』昭和四〇年五月講談社）というような肯定的評価もなされた。だが、「文学非力説」から「再び文学非力説に就いて」と「現状への直言」の間には微妙な変化があり、「文学非力説」で文学の非力性を主張しながら、「現状への直言」では、「生産文学

高見順の南方行と《文学非力説》（河田 和子）

とか、大陸開拓文学とか、さういつた何々文学」出でよと、野心的な文学を待望したりする。それゆえ、こうした変節に対し、「国策文学の非文学性批判の旗じるしをみずからおろさざるを得なかった」（平野謙「高見順の『文学非力説』」昭和四八年二月一四日『毎日新聞』夕刊）と高見の文学的後退を見たり、また、文化の「破産状態に対する高見順のある諦めを表明したもの」（亀井秀雄「他民族体験と文学非力説」昭和四五年五月『日本近代文学』）というように、高見の変節は極めて消極的な姿勢として見られている。さらには、この変節において、文学における抵抗が如何に曖昧な形でしか存在し得なかったものであるかが物語られており、そこに「文学者の転落の典型的パターン」（中川皓司「戦時下の高見順——『芸術的抵抗』への疑問——」昭和五一年三月『中央大学国文』）があるのだとする見解もある。「文学非力説」から「現状への直言」にかけての変節を如何に見るかで、その評価も変わってくるのだが、従来の論では、高見の文学的後退として見られる傾向がある。

しかしながら、「文学非力説」以下の一連のエッセイが、戦争や時局に対する芸術的抵抗であったのか屈服であったのかという問題提起の仕方自体、高見自身、否定するような主張を戦後にしていたことに留意すべきであ

ろう。例えば、戦後、「戦争はなんだつたか」（昭和三六年二月七〜九日『朝日新聞』）で、高見は「事実としての抵抗」はなかったことを述懐している。

私はあの戦争に対して自分で抵抗といへるやうなことをしたかどうか、さう考へるとき、すこしもなかつたといふ方が正しいと思ふ。恥づかしいけど、うそをいつてはならぬ。主観的にはこの私にも抵抗の実感がなかつたわけではないが、事実として生じた抵抗ではなかつた。

高見は、「主観としての抵抗」と「事実としての抵抗」とを分け、「実情はほんの一部の人をのぞいては抵抗はありなかつた」とする。抵抗が屈服かといった見方自体、文学者の戦争責任問題と絡んで出てきた戦後の視点にほかならない。そもそも、戦争に対する認識も戦前戦中と戦後とは断絶があり、戦中の認識には、戦後的な枠組みから外れてくる部分がある。そのことを強く意識していた高見は、「聖戦といふことに多くの疑問があつたやうに、侵略戦争といふ概念では何かはみ出てくるものがあり、国民感情として納得しがたいものがあつた。でもそれを肉声で語ることは、敗戦の実感から来た戦争憎悪に反するものとしてためらいがちだつた。」と述べている。敗戦以来、彼も戦争を憎悪していた。しかし、かつ

て体験した戦争が「聖戦」か「侵略戦争」かというところ、そのどちらの「概念」にも与し得ない、むしろそうした「概念」的な枠組みでは捉え切れないところで、高見は戦争を認識していたのである。

だからこそ、高見は、何よりもまず「事実」としての戦争を見据えようとするのであり、「戦争はなんだつたか」でも、次のように結ばれている。

私はさきに山村出身兵の軍隊観を述べた。ああいふ種類の戦争観も聞きたい。あの戦争は面白かったと見てゐる人があるかもしれない。みんなまづ事実を出しあはうではないか。概念的に戦争の悲惨をいふより、事実として面白かったといふそのことの中にひそむ悲惨を具体的に見る必要がある。そうしてこそはじめて、戦争はもうごめんだといふことがいへるやうになるのだ。

高見は、「軍隊に入つて初めてメシが腹いっぱい食べた」時の感激が山村出身兵には強かったことなど、その肉声を批判するのではなく、まず事実として認識することを重視した。ただ「概念的」に戦争の悲惨さを説いても、その悲惨さは見えて来ない。寧ろ戦争の本当の悲惨さは、事実としては面白かったという実感のうちに潜んでいる。そのことを、高見は、敗戦で痛感したのである。

こうした高見の戦争認識から想起されるのは、戦争に対する内省をしながら、戦中派の複雑な心情、肉声を吐露した吉田満の「散華の世代」（昭和四〇年九月『中央公論』）であろう。吉田も、当時の戦争に対する認識をこう記している。

それぞれの兵士は自分の人生を引きずってきており、その人生に、さらにまたいく人かずつの人生が結ばれている。戦争を構成する個々の接点には、人間性の昂りがある。あえていえば、生命の充実感がある。人間が自分の生に執着するかぎり、そこに必

ず生まれてくるような、気力の燃焼がある。

このような昂りを、そのまま肯定するというのではない。このような昂りを含むからこそ、戦争はいっそう悲惨だといいたいのである。<sup>33</sup>

ここに加害者意識が欠如していることはさておき、「人間性の戦争を構成する個々の接点には、人間性の昂りがある」という、その「人間性の昂り」こそ、まさしく、高見が戦中、自らの文学の中で希求していたものであったことに留意したいのである。「支那事変」勃発後に発表された『如何なる星の下に』（昭和一四年一月、昭和一五年三月『文芸』／昭和一五年四月新潮社刊）でも、次のような箇所がある。

「文学とは人間探求の仕事である。だから文学の対象となる人間のうちには、人間の能力の最大限を発揮した人も入れば、その最小限に生きた人も入る。だが、文学は後者により執着してゐた。其処には例の人間味が豊かに露出されてゐるからだ。——さうした文学がこのたび戦争と直面した。戦争は人間の能力の最大限に発揮せられる偉大な営みである。それは人間の営みであるが、所謂人間味の低さに於てでなく、高い精神の昂揚に於て初めて為される。さうした厳粛な事実、一般に、人間の能力の最大限の発揮を同じレベルに高められた人間性に於て描く文学の待望を齎してゐる」

私は自身でさうした小説が書きたかつた。その書きたいという気持は、うそいつわりのないものであつたが、気持と実際とは一緒にならなかつた。（「第七回 日記と註から成る一回」）

この小説は、高見と思しき作家、倉橋が一人称形式で語るものだが、ここでは高見の当時の認識がそのまま生の形で提出されている。「」の文章は、A新聞に発表した倉橋の「カコミ評論」であるが、高見の「人間味」（昭和

和一三年一月二七日『東京朝日新聞』）の後半部分をそのまま抜粋したものである。戦争を「人間の能力の最大限に発揮せられる偉大な営み」として捉えた、この高見の認識に対し、戦争の裏面が見えてないと批判するのは容易だが、それは平和時の視点にほかならない。戦時の事実認識を戦後の認識から安易に裁断するならば、その時に高見が抱えていた問題意識を見落とすことになる。戦後の高見の複雑な心境も見損なうことになる。高見が、戦争をこのように受け止めたのも、「人間の能力の最大限の発揮を同じレベルに高められた人間性に於て描く文学」を待望していたからだということを見落とすべきではない。「最大限のレベルに高められた人間性に於いて、人間を描く」ことを希求し、そこに「来るべき小説文学のひとつの性格」を見ていた（『小説の運命』を問はれて）昭和一五年一二月『帝国大学新聞』）ことが彼の戦争認識にも関わっていた。戦争を認容したのも、文学上の人間性探求の問題が、高見に切実なものとしてあつたからだということにひとまず留意しておきたいのである。

だが、こうした、勇ましい文学を希求しながら、やがて一見逆とも見えるような文学の非力性を「文学非力説」において主張しだすのは何故なのかということが問題になってこよう。そこには高見の南方体験が反映されていると見られるのだが、「再び文学非力説に就いて」や「現状への直言」において指摘されている変節も、その起因は南方行の経緯に関係していると考えられる。そこで、本稿では、高見の南方行の経緯を見ていくことで、『文学非力説』一連のエッセイの変節の問題を考察していくことにしたい。

## 二、文学上の方向転換と南方

まず、「文学非力説」を書く契機にもなった蘭印旅行から見ていきたいが、高見が旅立った時期の蘭印は、国際的にも非常に緊迫していた状態にあった。昭和一四年、欧州で戦争が勃発し、一五年五月はじめにドイツの侵入を受けてオランダは占領、一四日には首相が英国に脱出し、オランダ政府はロンドンに移転した。それ故、オランダの植民地たる蘭印は本国を失い、戦争の禍に引き入れられる危険性が高まっていた。蘭印内のドイツ人は抑留、財産処分の上捕虜として収容されたことが『東京朝日新聞』昭和一五年五月一六日の記事にも出ている。一方、日本は、ドイツのオランダ侵入に際して有田外相の声明で蘭印の現状維持を主張していた<sup>3</sup>。が、実際は蘭印侵略の口実を与えるためではないかという猜疑心によって蘭印では排日の空気が高まり、在住の日本人に対して極度の警戒がなされていた。対日感情の悪化で、蘭印内の日本人に対する差別的待遇<sup>4</sup>、ひいては侮辱事件まで生じ、非常に緊迫した状態にあった。当時、蘭印在住の日本人は、約七千人、内地の余剰人口のはけ口として、また石油やゴム等の資源や市場獲得の場として、日本の南進政策が推進されていた。だが、蘭印の資源はイギリス・アメリカ資本が握っており、蘭印は、経済的にも政治的にも英米に依存していた。日本は、九月にはドイツ・イタリアと結んだ三国同盟の条章で東亜の指導権を掌握、アメリカ・イギリスの勢力を牽制しながら、東亜における自給自足体制を得て「大東亜共栄圏」（地域的共同体制）を建設しようとしていた。高見が蘭印へ行っていたのは、昭和一六年一月下旬から五月初旬までだが、蘭印と日本の間で緊張が高まっていた、まさに「一触即発」の形勢にあった時期であったのである。

高見は何故、そんな中をわざわざ旅立っていったのか。

高見順の南方行と『文学非力説』（河田 和子）

「船中日記」（『蘭印の印象』昭和一六年九月改造社所収、高見順全集第一九巻では「南への旅」として纏められる）に、その時の心境が記されている。

私がまだ、映画会社東京発声の嘱託をやつてゐた時分、カメラマンが南洋へ行くといふ話を聞いて、一緒に行きたいと言つたのを覚えてゐる。あれは昭和一二年だつたか、一三年だつたか。

鮮やかな色彩にあこがれてゐた。灰色から抜け出たかつた。——事実、真赤な大きなげしき花などを見たいと思つたが、さういうことは、私の気持のいはば象徴といへる。（中略）南といつても、はつきり南のどこときまつてゐるわけではなかつた。ただ南方、——南洋なのであつた。（中略）

「一触即発」の状態で、見物などとても出来ないらしいですよ、尾行がつくさうですからね。」そんなことを一斉に言はれた。「戦争にでもなれば捕へられて帰れなくなるぜ」などとおどかさねられた。（中略）物騒な話は、船の中でも相変らず取り交わされてゐる。その不安もさう強くなまなましく心に來ないのだ。どうにでもなれ、どうにかなるだらう、そんな「落ち着いた」心である。その「落ち着き」が私には寂しいのだ。もつと荒々しく揺れてほしいのだ。（中略）ジャバは私の「不感性」を直してくれるだらうか。

「灰色から抜け出たかつた。」というように、高見の漠然とした南洋への憧れは、「不感性」による行き詰まりを脱却しようとする願望に由来している。

「感激も驚きも一向にない」、「弾力を失つたゴムのような心」の「不感性」は、そもそも、何から生じたのか。それは、これまでの説話体小説に「マンネリズム」を感じ出したところから発している。彼の説話体小説は、「作者をして作品のうしろにすつかりかくれんぼをさせる所

の近代小説の客観主義的結構に対する不信」（このモダモダや如何にせん）昭和一〇年七月『文芸通信』から出てきたものであるが、描写の客観的共感性に対する不信には、左翼思想からの転向も関わっている。『故郷忘れ得べき』（昭和一一年一〇月人民社、初刊本）は、饒舌的な説話体小説の代表作だが、それは「転向者の陥つた卑屈な自己に対する嫌悪とニヒリズムとを、『泥を吐くように』告白した自意識過剰の文学」（杉山平助『文芸五〇年史』昭和一七年一月『鱗書房』）であつた。河上徹太郎は「文芸時評 文芸と思想」（昭和一一年一月『新潮』）で、「マルキシズムの唯物観の嵐しが狂暴に吹きまわつたわが文壇は、その嵐しの引いたあと、矮小な自我の棒杭がてんでに残つてゐるだけでこれが膨大な世界理論を支へねばならず、ここに世にも不思議な驕慢と無力の交錯した精神相が覗はれる」と述べたが、高見の説話体小説も、左翼思想から転向して「矮小な自我の棒杭がてんでに残つてゐるだけ」の状況に居直り、客観的理論を喪失したところの自己崩壊、自我の分裂を、一種の方法として自嘲的、戯画的に語るものであつた。それは、自我崩壊の危機を表象する二〇世紀的なテーマとも繋がっている。

しかしながら、「支那事変」勃発後、自我分裂の小説に対する反省がなされるようになる。「戦争といふ深刻で厳肅な、大きな現実のうねりに一度直面した後の眼には、現代小説といふものが如何にも脾弱でヤクザでちつぽけな役立たずのものに見え」（今日の文学」昭和一二年一二月四、八、一四日『読売新聞』）、その脆弱感、卑小感は、今までの日本の小説が、社会の片隅で、こっそり行われていて「何か手芸的な個人的な営み」（『文学する悩み』昭和一三年一月『月刊文章』）であつたことに由来していると高見は意識する。小説に書かれた自我の分裂、その脆弱な人間像は、小説そのものの脆弱さを

もたらし、ひいては純文学の不振を招来することにもなっている」と見られた。それ故、「小さな個人のいざこざや情痴にとらはれたヤクザなちつぽけな文学から社会的素材をとらへ、社会と共に呼吸し歩むところの動く遅い文学へと立ち上らねばならぬ」と反省され、「個人的な脆弱な感じの営みから遅く強く社会的に生きる文学的営みへと踏み込んで行くところに、文学の困難と悩みがある」（『文学する悩み』）と考えるようになっていく。そこに、かつてのプロレタリア文学に内在した文学の社会性を回復しようとした側面もあっただろうが、自己の問題に閉じこまらず広い社会的視野を持った「大きな文学」が希求されることになる。それ以前に書かれた説話体小説も自省されることになり、「説話体小説に自らマ・ンネリズムを感じ出した頃、ま・と・も・な、ま・つ・た・う・な小説」、「内容的には明るい太陽が燦爛と照つてゐるやうな健康な小説、形式的にはをかした説話体でない小説を書きたい」（『私の小説勉強』昭和一四年五月『文芸』）という思いに繋がっていく。

前述した『如何なる星の下に』も、そうした高見の小説に対する問題意識が強く表れた作品である。倉橋が、その心中を次のように述べている所は、この時期の高見の文学に対する思いが強く反映されている。

それに、私自身もはや、そんなでない小説、読者の精神を爽快にし健康にし高貴にし大胆にするやうな小説、出来たら生活への強い意欲、遅しい精神力といったものを湧き立たせるやうな小説、——遅しい強い小説といふのはさういふ意味だが、さうしたまっとうな小説を書きたい気持ちに漸く成つてゐたところだから、何か激しい鞭を感じた。私の小説の多くは、五〇糶多く跳んだ者に、あとからウジウジとメソメソと文句をつけて行くやうな小説だ。私は爽快地遅しく五〇米も跳ぶやうな小説を書きたいと思

つた。（第四回 落魄）

こうした「まっとうな小説」を書くという意識は、「支那事変」とともに出てきたものであり、戦争が一契機になつてはいるものの、高見にとつては、内に自ずと起きた「一種生理的な欲求のやうなもの」であつたことに注視したい。それまで高見が書いてきた説話体小説も、「五〇糶多く跳んだ者に、あとからウジウジとメソメソと文句をつけていくやうな小説だ」と自己批判されている。しかし、実際は、「生活への強い意欲、遅しい精神力といったものを湧き立たせるやうな小説」、即ち「爽快地遅しく五〇米も跳ぶやうな小説」は書けないで、その要求は満たされないまま、内に鬱積するばかりであつた。そのために、「一種のヒステリーみたいに成つてゐた」。それ故、「戦場へ行つたら、そのヒステリーみたいなものから救はれるかもしれない」と思つたりする。前述したやうな、「戦争は人間の能力の最大限に發揮せられる偉大な営みである」という戦争認識も、「ヒステリー」から脱すべく、脆弱な自己を叩き直したいという思いから発している。

『如何なる星の下に』は、浅草を舞台にした小説であるが、高見が、浅草にアパートの仮住まいをして小説を書き出したのも、「爽快地遅しく五〇米も跳ぶやうな小説」を希求していたからである。高見は、自分の脆弱な神経を強くすることができないかもしれない、そんな期待をさせるやうな民衆的な遅しさ、根強さが浅草にはあると考えていた。この小説は、傑作としてその評価も高いが、文学者としての高見の苦悶がよく反映されている。倉橋は、「浅草は民衆の盛り場といふぼんやりした（いい加減な）概念に惹かれ」、「民衆の群れのなかに自分を置きたい」、「民衆の持つてゐる素朴さ、率直さ、強靱さ等々で自分の神経を揉んで、ヒステリーを直したいと思」つて浅草を逍遙している。そして、動物園の熊を熊鍋と

して特別提供するという旨のピラを見た時も、熊の肉を「我慢して食ふと、神経が強靱になり、強靱で遅い小説が書けるかもしれない」と奇妙なことを考えたりする。その倉橋の姿には、高見自身の姿が映し出されている。彼は、「宙で空しく藻掻いてゐるやうな私を救つてくれる」として、浅草に「縋るべき何か」を求めていた。

しかし、「民衆の盛り場」——「浅草」に身を置きたいというのも、「いい加減な概念的なもの」にすぎない。そのことを高見も自覚しながら書いている。倉橋は、「猟奇趣味で浅草を見る人」と見られたり、浅草の女に好意を寄せるのも「鯛に食ひ飽きて鰯を食はうとしてゐる」のだと評されたりするが、それは一種のエキゾチズムから浅草を眺めている側面があるからである。倉橋にとつて浅草は「外国」であり、底辺に住む人々を観察する側に身を置き、浅草の生活に親しみ馴染みながらも、やはり浅草の住人にとつては外部者であつた。それと似た構造は、「真赤な大きなげししい花」を見ようとした彼の南方行においても見て取れるのだが、倉橋が浅草に来たのも「一種の旅」として意識されており、この時期の高見の心中には、既に旅への思いが強まっていたことがうかがえる。

こうした高見の、文学上の行き詰まりから脱出し、脆弱な神経を強くしようとする自己改造のベクトルは、浅草から南方の旅へと向けられることになる。いわば「爽快地遅しく五〇米も跳ぶやうな小説」を書くことを希求し、高見は南へと旅立つていくのである。『今年はどうな題材を』と問はれて（昭和一六年一月九日『都新聞』）でも、蘭印へ旅立つ高見の心中は、こう語られている。

近く、海を越えて南へ行く。（中略）南へ行く私の気持ちには、自分だけのをかした力みかもしれないが、人生に大胆に挑んで行く、その心のひとつのあらはれといふ、そんな強がりもある。

とにかく、心はちちに乱れてゐる。この乱れのうち、しかし私は私の「題材」があるのだと思つてゐる。

「人生に大胆に挑んで行く」ことは、「爽快に逞しく五〇米も跳ぶやうな小説」を書くことであるとともに、高見自身の自己改造にも繋がっている。蘭印旅行の後、高見は、その体験を素材として『ある晴れた日に』（昭和一六年一月河出書房）を書くが、野崎らが蘭印へ来たのも、「外へ出て自分を改造」しようとしたためで、無気力な精神状態から脱すべく「心機一転」を試みた旅として描かれる。

しかし、その旅先が、何故、浅草から蘭印、すなわち南方へと眼が向けられたのか。何故、「人生に大胆に挑んで行く」その跳躍台として南方が選ばれたのか。高見が、「真赤な大きなげししい花」に象徴される楽園のイメージで漠然と「南」に対する憧憬を抱いていたにしても、留意しておきたいのは、高見がそうした南への憧れを抱き始めた昭和一二、三年頃といえば、例えば、室伏高信の『南進論』（昭和一一年七月日本評論社）に象徴されるように、南方への関心が高まっていた時期であったということである。矢野暢の『「南進」の系譜』（昭和五〇年一〇月中公新書）によれば、この室伏の『南進論』は、時節柄、たいそう注目を集め、文体の平易さと修辭の巧みさによつて扇情的な効果を發揮したとされる。昭和一一年八月七日の五相会議では、南方問題が国策構想の中で取り上げられており、この書は実にタイムリーなものであった。南洋ものは、大正期の爆発的なブームからみると昭和一〇年頃まで沈滞気味だったが、この『南進論』は、「南進ブームの復活を見る昭和一〇年代の幕開けを飾るにふさわしい内容をもっていた」（『「南進」の系譜』と評されている）。

室伏の『南進論』は、北進から南進へ、国家レベルの

高見順の南方行と《文学非力説》（河田 和子）

南方発展を目指し、余剰人口のはけ口とともに資源、市場を獲得していく日本の国策上の方向転換を構想したものであった。日本の大陸政策において、排日運動が高まっていた所以を「自己反省」し、「北は侵略を意味し、南は解放を意味する」とした。もともと、この「解放」は、植民地支配から被征服民族を解放することを意味するのではなく、南洋における日本の「自己解放」にほかならなかった点で問題もある。が、室伏は、この書で「たゞ日本の国際政治を指し示した」のではない。この南進構想の前提として、「自由主義は利己主義の袋小路へと追いつめられ」、「自由の名のもとに制度も人間も機械化され、人は自らの理性と認識と技術の重圧の下に圧迫され、抑留され、窒息する」危機的状況、換言すれば、西洋の「近代主義の終滅」が認識されている。その危機から脱却すべく、日本は如何に方向転換していくかという、やがて近代の超克論にまで繋がっていく知識人の同時代的問題が内包されており、室伏は、西洋「模倣の時代から自己創造の時代へと到達し」、今こそ「日本の世紀」がやって来るといふ「夢」の実現を、南洋へと向けていたのである。

高見が、この書を読んだかは不明であるが、『南進論』には、高見の自己改造のモチーフにも通底する、次のような箇所がある。

一つの方向が与へられなければならぬ。これを新しい方向と呼ぶもよい。我々は既にその方向を指し示した。

南へ、南へ。

南の国へと、我々はいつて来た。南の海と森とへ、常緑の国へ、そしてまた常春の国へ、——太陽直下の国へ。（中略）

南へ、南へ！

人よ、南への方向がたゞ日本の国際政治を指し示

したものと思つてはならない。これは日本の全生活の更新を意味する。日本の全面的な新方向を、革新を若返りを、飛躍を、天才的な跳躍を。

室伏は、序文で、「これは、日本の方向転換の書」であり、「日本の自己認識、自己反省、同時に日本の自己飛躍の書」だとも述べている。ここで主張されているように、「方向転換の時」、ある開拓精神のような気概を持つて南洋へ行くといった風な関心の高まりがあったことは、高見にも間接的に影響しているだろう。「明るい太陽が燦爛と照つてゐるやうな健康な小説」（私の小説勉強「前出」）を求め、自己改造をしようとしていた高見が、南方へ目を向けたのも、文学の新しい方向性が見いだされるかもしれないという期待があったからである。

高見は、『小説の運命』を問はれて（前出）において、「近代小説理念の行きづまり」を問題にし、近代小説の理念たるデモクラシーが「歴史的な役割を終へてゐる」という認識を持っていた。それ故に、小説の革新ということが求められていたのである。その革新とは、「最大限のレベルに高められた人間性に於いて人間を描くということ」にあり、それは、人間の弱点を通して人間性を探求する「旧時代的な人間観からの文学の解放」、即ち「小説に於ける人間観の転換」を意味していた。

高見の南方行は、そうした文学上の方向転換、内面的な自己改造をもくろんだものであった。が、その内面的な方向転換が日本の南進政策とも連動していたという側面もあることは否めない。現に、蘭印へ行く直前、高見は、『転換期に於ける作家の覚悟』を問はれて（昭和一五年一月『新潮』）において、「文学全体としては、再建設への転換期に立つてゐる」という認識の下、「新文化建設といふことを、進んで自分たちの当らなくてはならない問題といふ具合に考へて、その点で協力しよう」ということも述べている。新体制下、「新文化建設」が

スローガンとなっていたからだ、しかし、高見が、文学の問題を国家レベルから考えようとしたのも、「社会と共に呼吸し歩むところの動く遅い文学」を創出しようとしていたからであって、時局に迎合したのではない。自分自身の文学の転換を文学全体の方向転換に、ひいては国家全体の方向転換に重ねて見ていたような所があり、南方が、日本全体の方向転換の場と見なされていたことが、高見の内面の方向転換の場にもなりやすくていたのである。高見は、南方で蘭印を取り巻く国際的な力関係を目の当たりにした時、自分の帰属する祖国日本を強く意識しただすのだが、それも無自覚のうちにも彼が、日本の南進政策の枠組みの中にいたことによるのである。

### 三、植民地支配下のジャワ・バリと祖国意識

文学上の方向転換をもくろんで南方へと旅立つた高見は、ジャワのスラバヤに約二〇日間居て、それからバリ島に約一月、後の半月をジャワの島旅行に費すことになる。ジャワへ行く前は、「南洋の持つてゐる（と想像した）健康的なもので心はみづみづしくすこやかにしたい」（『文化の儂さ』昭和一六年五月二七〜二九日『都新聞』）と意気込んでいた高見であった。しかしながら、蘭印で植民地支配の現実を目の当たりにし、そうした南洋のイメージがいかに非現実的で空虚なものであったかを知らされることになる。

ジャワで高見が見たものは、白人支配による植民地の現実の姿であり、日本人とよく似たインドネシア人の卑屈さだった。高見が、「蘭印の印象」（昭和一六年六月『改造』）で、旅の印象記でも書こうとすると「ヒステリー気味」にならざるを得ないと述べているのもそのことに

起因している。

彼等の「尊重」政策は、所詮自分さへよければ、土民はどうなつてもかまはぬといふ考へ方だと言はれても、しようがないやうである。（中略）この一種のヒステリー気味はどういふのだらう。日本を出たのは一月の末、そして今は、四月の下旬、その間の、日本の新聞や雑誌などに掲載された、蘭印に関する諸種の文章を、私は読んでいないが、出てくる前に読んだ範囲では、実のところ、蘭印に関するものはいづれもヒステリー気味が感じられ、私はそこで私だけはひとつ「冷静」に見て「冷静」な印象記でも書こうと思つたものだつた。ところが、いざとなると……。

ジャワ人に対する「尊重」政策も、オランダ人と全く同じ服装をすることは禁止されており、悪習（幼少年の喫煙など）は放任され「土民の無知蒙昧をそのまま『尊重』して教育もほどこさずにいる。慣習の「尊重」政策に支配者側のエゴイズムとジャワ人に対する輕蔑が潜んでおり、オランダ人の差別的な放任政策に対して高見は「ヒステリー気味」にならざるを得ないのである。

高見は、旅立つ前にも、蘭印に関する記事を読んでいた。彼の目に触れていたかは不明だが、読んだ可能性のあるものとして、例えば、座談会「南進国策の新展開」（昭和一五年八月『文芸春秋』）があり、「蘭印の印象」で指摘されたような論調も見られる。この座談会において、南洋興発の重役、斎藤文也は、土民を教育せず、彼らの生活をそのままの状態にしているのでは、植民地でもなくて搾取場にすぎないと、蘭印におけるオランダの差別政策を批判している。蘭印に関するものに感じられる「ヒステリー気味」というのも、こうした論調を指すものと見られる。

冷静に努めようとした高見が、オランダ人の差別政策

に対し「ヒステリー気味」にならざるを得なかったのは、植民地支配の下では、文化的土台が欠如しているという根本的な問題に気づかされたからであった。「文化の儂さ」において、高見は、こう述べている。

思ふに、同じ外国でも、古い文化的遺産を、その時代から今日までずつとつづいてゐる文化の線に於いて、遺産として持つてゐるのと、その線が現在に切断されてゐて、その切断された過去のなかに遺物として持つてゐるのでは、大變な違ひである。大變さは私はジャワで始めて知らされた。（中略）私は文化の儂さをしみじみと知らされたのである。文化の、よつてもつて育つところの土台を根こそぎやられては、文化もへちまもあつたものではない。

ここである文化の土台とは、国家のことを指しているのだが、国を失つた被征服民族の文化の儂さの認識は、高見の自己改造のモチーフにもつながっており、高見自身の蘭印体験をもとにして書かれた小説、『ある晴れた日に』にも反映されていくことになる。

『ある晴れた日に』では、元新聞記者の野崎と通俗小説家網代の二人が、自己改造の為にバリを訪れるが、木村一信（高見順〈南方行〉序説）平成三年六月『日本の文学』の指摘のとおり、小説家高見をやや偽悪的にデフォルメして造形したのが網代で、高見の心性を抽出した人物が野崎と見ることも出来よう。性格的には対照的だが、バリ人の踊りには双方とも非常に感激する。しかし、その神聖な踊りが外国人観光客の為の見世物にされ、オランダ人の支配下で「奴隸の芸術にされてゐる」ことに彼らは切なさを感じる。網代は、その時、野崎にこうも言う。

「いや僕自身、旅に出てよかつたとしみじみ思つてゐる。白状するとね、僕は自己改造の何のと言つてはゐるが、実のところ、目下問題の蘭印に新しい材

料を探すといふ商売気が無い訳ではなかった。ところが、——ほんたうに自己改造が行はれさうだ。まだ、さう大きいことは言へんがね。」(第四章一)

網代に同感する野崎もまた、「出来たら自分を変へてみたいと思つてゐます」と述べるのだが、白人による植民地支配の現実を認識したことが、彼らの自己改造の欲求を刺激する。そして、バリー人のように「白人の慰みのために踊る」のではなく、自分の「芸のために踊る」ことに、自分たちの在り方も見いだしている。

当初、野崎は、バリー島を観光する際、「エロチック」で「音楽と踊りの夢幻的な国」、「千の寺院のある怪異な島」といった「猟奇的なバリー観」を抱いていたのだが、そうしたバリー観が、実は支配者側の《オリエンタリズム》<sup>⑧</sup>を構成することになっていることを自覚する。オランダ人経営のバリー・ホテルが演出している夢幻的なバリー観に対しても、「偏つたバリー観、バリー人は好ましく思はないであらうバリー観」、「少しく意地悪に言へば、さうしたバリー観を与へる可くたくまれたものと言へないこともない。バリーをさういふ工合に夢幻的に怪異的に見させて、現実から目をそらせようと、意識的に計画的にやつてゐるわけではないかもしれないが、客観的にはさういふことになる。」と植民地支配者側の魂胆が潜在していることを認識している。夢幻的怪異的なバリー観を作り上げていることで、意識的にせよ無意識にせよ、植民地支配の「現実」が隠蔽されている、そのことに野崎は気づき出す。

だから、ホテル側の手配により、バリー人の部落で踊りを見る機会を得た際も、野崎自身、オランダ人の座る椅子に腰掛け「征服者側」に身を置いていることに気づいて、心苦しさを感ぜずにはいらなかったのである。

しかも、眼前のバリー人は日本人そっくりだった。

そして、野崎はその和蘭人が腰掛ける椅子に今腰

掛けてゐるのであつた。

その老人の顔は日本人に似てゐた。野崎の知り合ひの誰かにその老人とそっくりの人がゐた。(中略)

そのやうな民族の前で、日本人である野崎が、彼等の悪逆な征服者である和蘭人の腰掛ける椅子に就いて、さうしていはば彼等に対して自分が征服者側に立つてゐるといふのは、野崎の心を苦しめずにはおなかつた。(第四章六)

しかし、問題は、その後であり、バリー人の部落に日本人が近づくのを懸念するオランダ人によつて、「猜疑と警戒の目で監視され」ている立場にあることを野崎が意識する時、「自分が征服者側に立つてゐる」という認識は立ち消えになってしまふ。そして、野崎は、バリー人の踊りから、日本の盆踊りを想起したりするが、しかし、日本の盆踊りならば、バリーのように金で買われることはないことに愕然とする。

曾ては、バリーの踊りも亦神々のため、彼等自身のための踊りであつて、金のための踊り、異国人に見物させるための踊りではなかつたはずだ。だのに……。

野崎の胸に、日本に生れた仕合せさ、日本人であることの有り難さが、泣きたいやうな痛烈さで迫つてきた。それはやがて、祖国への烈しい愛情を呼び覚まし、さうして、それは嘗てない切実さで野崎の胸のうちにこみ上げて来るのだつた。(第四章六)

この小説は、ここで未完のまま終わつてゐる。野崎がバリーの踊りから日本の盆踊りを想起したのは、オランダ人に監視されることで、自分たちも寧ろバリー人の立場に近いと考えたからである。が、空白の後の部分で、烈しい祖国への思いに野崎が駆られていくのは、唐突で飛躍があると言わざるを得ない。バリー人に対する同情が

こうした祖国への愛情へと移行するのは、どのような意識によつてなのか。

そのことを考えるにあつては、「再び文学非力説に就いて」の中の、次の言説が手掛かりとならう。

土着の民族が白人に征服されて、自分たちの国家といふものを持たず、白人の植民地のなかに被征服民族として生きることを余儀なくせられてゐる、そんな悲惨な現実を見て私は、今更ながら、どんなことをしても国家といふものは守らねばならぬと犇々と感じさせられたのである。(中略) 国家のないところに文化は許されないのが、きびしい現実であつた。国は守らねばならぬと思つた。

この言説に照らしてみれば、バリー人の神聖な踊りが征服者側によつて金で見せ物にされている点に、野崎は「国家のないところに文化が許されない」厳しい現実を見たのである。即ち、文化的土台がない被征服民族の「文化の儚さ」を意識し、バリー人に憐憫の情を抱きつつも、日本はそうした悲惨な状況から免れていることに「日本に生れた仕合せさ」、「日本人であることの有り難さ」を感じたのである。文化の土台のないバリー人に同情を抱き、オランダ人と同じく征服者側に自分もいることに一旦気づきながらも、白人支配から免れた祖国日本に対する愛情を意識する方向へと横滑りしてしまふ。オランダ人の差別政策を批判していた高見も、自国の有り難さを感じるところで、結局その差別政策を容認しており、その矛盾には気づいていなかったことになる。

高見は、ジャワ人のような卑屈さがなく、バリー人に対しては親愛の情も抱いていたし、ジャワのガメラ音楽やバリー人の踊り等、被征服民族の芸術も理解しようとする眼差しを持っていた。そして、彼らに対する偏見も排除しようとはしていた。だが、それ以上に、蘭印在住の日本人の姿に深く同情し、そのことが彼の祖国

意識を強く喚起することになっている。「蘭印の印象」(前出)でも、邦人の進出に対し「まだ年が浅いの、浅い割に、そして数が少い割に立派な進出振りを見せてゐるのには、お世辞ではなく、感嘆し、力強く思つた」と書くように、彼らの姿に高見は、南進日本の姿を見ている。対日感情が悪化していた中、高見は、日本人の体面を守ろうとする在留邦人の健全な姿に同朋意識を抱き、彼らに感心しつつその背後に祖国日本があることを強く意識せずにはいられなかったのである。さらに、高見が帰国した後の昭和一六年七月には、日本資産凍結となり、いよいよ蘭印との通商関係が悪化、排日は極点に達して、九月には蘭印から千名に近い引揚げがなされる。新聞でその引揚げを知った高見は、その時、「胸の熱くなる」のを覚え、彼らに対し心底から同情している(「蘭印から帰つて」昭和一六年一月四日『読売新聞』)。そうした高見に、いよいよ愛国意識が強まっていたのも当然のことであつた。彼の南方の旅も、日本の南進政策とやはり無関係ではあり得なかつたゆえんである。

#### 四、南方の文化工作に対する「文学非力説」

高見が蘭印へ行っていた時期、「大東亜共栄圏」における文化的指導の方策として、日本文学はどうすべきか、というような問題が文壇でしばしば議論され、日本の南進政策の発展とともに、文学も、「支那」や南方の他民族に対する文化工作の一翼を担おうとする風潮が高まっていた。昭和一六年三月一〇日第一〇四号の『日本学芸新聞』に掲載された「日本文芸中央会の使命」では、次のような事が掲げられている。

国民文芸の樹立とは、国家の直面せる歴史的現実の中に国民の生活の真実を掴み取り、民族発展の歴史の必然の過程と一致して国民の精神を振興させ、国

家をして、当面には東亜共栄圏に於て、究極には世界に於て、最高の文化国家たらしむるために、文芸の側から翼賛するといふことであらう。

同新聞三月二五日第一〇五号では、『南方特輯』として、金内良輔の「南方への文化政策に就て」、新居格の「南方との文化的連繫」も掲載されている。また、昭和一六年五月二〇日の『読売新聞』では、櫻田常久が「萬人の分身へ 私小説と庶民小説」でこう述べていた。

東亜共栄圏確立の道程において先づ日本の文化が東亜諸民族の前に堂々と示さるべきである。その意味においても、私は「私小説」や庶民小説を、これこそ諸君の兄たる日本の文学だ、といふ気にはなれないのである。

この評論は「文学非力説」の中でも批判されており、高見は、こうした論調の「景気のいい文学論」が台頭して来たことに懸念を示している。「東亜共栄圏」確立のための文化工作として、南方とかに文学を持つて行くということ自体、小説家の自惚れであつて、高見は、「国への奉公を旗印にしながら、文学の強力といふことに目がくれて、却つて奇怪な文学至上主義に陥つてゐる」と批判する。

日本文学を南方の文化工作に役立てることに對して懷疑の姿勢を示していたのは、高見だけでない。石川達三も、高見と小松清の座談会「南方旅行」(昭和一六年九月『文芸』)において、同様の態度を取っていた。六月に南洋群島へ行つていた石川は、「南方共栄圏にたいして有力である文学を書かうなんといふことは、これは文学者の考ふべきことではないと思ふのだね。考へてみたつて始まらないと思ふのだ。」と述べ、南方民族に対する文化工作として、海外向けに日本文学を書くことが有効なのか疑問を抱いていた。

南方文化工作の一方法として、文学を考えることは、

日本の南進政策の一翼を担うものとして文学を見ることにほかならない。高見や石川も、日本の南進政策そのものに對して疑問を持っていたわけではなかったが、実際のな面で文学を考えることには懐疑的であつた。特に高見の場合、文化的土台のない蘭印の現状を見てきただけに、そうした民族を文化的に指導していくような實際的力が文学にあるという風には到底考えにくかつたのである。文学をやっているジャワ人も、王族とか金持ち階級とか人口の約一割程度に限られ、「もし南方に対する文化政策といふものを立てる場合の焦点をどこにおくかといふと、さういふ連中は、特殊な例であるといふことであつて、問題にならない対象」(「南方旅行」)だつた。だから、高見は、文化工作をするならば、芸術等の「精神文化」より、まず實際的方策としての「生活文化」、即ち科学や医療といった物質的技術的側面からなされるべきだと考えていたのである。その点では、彼も文化工作に反対ではなかつた。

高見が蘭印から帰国した時、文学非力説を主張したずのも、「大東亜共栄圏」に含まれる「南方共栄圏」確立の文化政策の一環として文学を實際的方面から考える議論があり、それに対する高見の懷疑が込められていたことを考慮しておく必要がある。彼は、蘭印へ行く前に遅い大きな文学を希求していたとはいへ、それは内面的な創造力の問題であつて、海外向けに日本の文学を考えるのとは別次元の問題であつた。しかも、バリーにおいて、バリー人の素晴らしい芸術、踊りでさえも、征服民族に隷属した形とならざるをえない状況に、高見は被征服民族の「文化の儂さ」を痛感しないではいられなかつた。だから、先の座談会でも、彼は、次のように述べている。

『蘭印探訪記』といふ映画に踊がいくらかあつたのですが、舞踊の人が観たら非常にいい舞踊だといつ

てみたさうです。ところが、そんな舞踊が奴隷の芸術だからね。奴隷に落されてゐるのだからね。さういふことを考へると、どんなに僕なんか、芸があつたつて国が亡びたら仕様がなないといふことを感ずる。

それからもう一つは、どんないい芸術があつたつて、国を護る力といふのはもつと他の力だ。」

高見は、バリー人の踊りの素晴らしさに大変感嘆していたが、しかし、被征服民族であるがゆえに、その踊りが「奴隷の芸術」になり下がつており、国を護る力と芸術は別物だということを強く意識している。帰国後、高見が国を守ることに對して文学の非力性を主張しだすのも、そうした蘭印での認識があつたからにほかならない。

白人に征服され植民地とされたために、住民の文化の歴史は断ち切れ、無慚な文化的荒蕪を見せてゐる不幸な土地へ行つて、私は、文化の儂さを見しめじみと知らされた。文化を守るためには、文化の土台たる国を守らねばならぬ。その力に於いては所詮、文学などといふものは非力なものだと、つくづく思はせられた。しかしそのことは文学を否定する意味ではないのだ。文学の持つてゐる十分偉大なもの、それは承知しながら、その非力さをよく弁へておかねばならぬと思つたのである。

「文学非力説」において、このように主張したのも、たとえ素晴らしい芸術があろうと国を守る力には成り難いからである。だが、芸術や文学それ自体の意味はそのことで失われるのではなく、「生活に於ける小なるもの」を汲みあげる所に「文学に於ける偉大なものの小ささ」があり、文学の非力性を「誠実に弁へる」態度が必要だと高見は考へていた。

「支那事変」以来、文学の脆弱さを問題にしていたように、文学の非力性の認識それ自体は、高見に一貫して

見られるものである。しかし、文学の非力性をどう受け止めるのか、その向き合い方が南方行の前後で変わつてきている。文学の非力性に対する高見の受け止め方の変化は、蘭印から歸つて「文化」と「文学」を区別するようになる所に顕著に表れている。南方へ行く前の段階では、「文化」と「文学」の区別は特になされなかつたし、「新文化建設」がスローガンとして叫ばれた時も、文学再建の立場において協力しようとしていた。ところが、「文学非力説」では、「文化」と「文学」を実際の能力の有無で区分するようになり、「文化といふのは、かやうに直接的な実際の強い力を持ちうるけれど、文化がさうだからといつて、文化の一分野である文学も亦直接的な実際のな力を持つてゐると早合点したり自惚れたりすることはできない」とする。このように「文学」と「文化」を区別したところにも、南方の文化工作として實際の方策から文学を捉へることに對する高見の違和感が示されているのである。

しかし、問題として残るのは、やはり「文学非力説」から「再び文学非力説に就いて」や「現状への直言」にかけての変節の問題である。尾崎士郎から、「文学の純粹さを文学的伝統の中に守ろうとする態度」は「自由主義の持つ敵性に氣脈を通ずるもの」であり、「文学非力説」は、「時代に對する抗議を示してゐる」と誤解されることにもなつた（「決意について」昭和一六年八月六日 八日『都新聞』<sup>14</sup>）。そのため、高見は、「再び文学非力説に就いて」において、「景氣のいい文学論」「文学者の増上慢」に抗議したのであり、「時代に對する抗議」ではないと弁明するのだが、そのことで高見の力点が微妙に変わつてくる。「再び文学非力説に就いて」では、非力とは言つても文学は国家の運命と背馳するものではないという方向へ傾斜する。そうした横滑りが、前述した『ある晴れた日に』の結末でも、祖国意識への横滑り

として現れてくるのである。

さらに「現状への直言」では、小説の沈滞状況を憂慮し、「生産文学とか、大陸開拓文学とか」の荒っぽい野心的なものを求めて、「力強い文学出でよ」というようになっていく。そもそも「文学非力説」において、「文学に於ける偉大なものの小ささ」を重視し、文学の非力性を称へていながら、「現状への直言」では、力強い文学が求められているのは矛盾がある。そのために、そこに高見の変節を見、結局時流に迎合せざるを得なかつたのだと見られやすい。しかしながら、想起したいのは、高見は、南方へ行く前、文学上の行き詰まりから脱却しようとして遅い文学を求めていたということである。高見が「現状への直言」で力強い文学を希求せずにはいられなかつたのも、文学が国を守る上では非力であるということとは別に、文学の沈滞状況が文学内部の問題として克服されなくてはならないことだつたからである。

文学非力説を書いた私が、そこで力強い文学出でよと言つては、再び食言の譏りを免れないであらうか。だが、諸雑誌の小説の沈滞振りを見ては、私個人が変節漢のオッチョコチョイのと罵られようとかまはない、どうしても、これは沈滞から抜け出ないことには困るのである。

高見は、文学の非力性を認めながらも、文学が直面している沈滞状況はそのまましておく訳にはいかなかった。無論、高見も、検閲による言論統制のために、ものが書きにくくなつており、そのために文学の沈滞を来していることは了解していた。しかし、そんな中でも、ものを書き続けていく新しい方向性を高見は見いだそうとしていた。それは、『ある晴れた日に』でも、『だんだん窮屈になつて』得意の筆を振ふことができなくなつてゐた。『方向転換』をしなければならなくなつてゐた」と書いていることからうかがえよう。言論統制が厳しくなつ

ていく中で何とか書ける方向を見いだしていくこと、それ以外に自我崩壊の文学から脱却することも出来ないからである。「現状への直言」において、再び、力強い文学が求められたのもそのためであって、時局に迎合したというのではない。むしろ、高見は、時局に迎合仕切れないところに寧ろ文学の非力さを見、「力強い文学を書けば、それは国防的な実効力を持ちうる」といふやうな気持ちにまでは行けない」点では「文学非力説」の立場も保持されている。力強い文学の希求も、高見が抱え続けてきた文学上の問題から再び浮上して来たものなのである。

「現状への直言」で、坂本徳松の評論「南方問題の文化的基礎」（昭和一六年一〇月『中央公論』）に注目したのも、文学の沈滞状況に対する高見の憂慮からである。この評論は、日本の南進を実際の方策の問題として考える立場から述べられ、「アジアに於けるヨーロッパのアジア化」が課題とされている。

日本の素晴らしい文化的発展、言ひかへれば単にヨーロッパ化に於てのみでなく、更にその日本化といふ面に於て、われわれは若きアジアへの親しき共感を喚起しなければならない。この意味で日本はアジアの新しい典型とならねばならないのである。

高見はこの論を、「東亜共栄圏の文化工作の問題が（それだけではないが）扱われてゐるのだが、さうした実際の方策の問題に『夢』が含まれて」いてよいとし、「日本はいま壮大な『夢』を描いてゐる」と述べている。この坂本の評論の「夢」は、西洋模倣の時代から日本の世紀がやってくるとした、室伏の『南進論』の夢の延長線上にあるものと言え、時局をまさしく反映したものであったが、高見がこの評論を評価したのも、小説そのものに夢もなく沈滞している状況があったからにほかならない。また、蘭印でインドネシア人が文化的土台を持ち得

ないまま、西洋化されている現実を見たことも関わっているだろう。植民地の現状を変革しようとしている坂本の論に高見は壮大な夢を見ようとしていた。しかし、それは、文学の問題でなく、やはり「実際の方策の問題」として見ていたことに留意すべきである。

「現状への直言」において高見の論調が変わるのも、文学の非力性を「誠実に弁え」ようとしながらも、南方へ行く前から問題にしていた文学の脆弱さは克服されないままであり、それを解決しようとしていたからである。高見の南方行きにしても、「現状への直言」に見られる変節にしても、自己崩壊の文学から抜け出して、如何に新しい文学を打ち立てていくか、その問題を考えようと苦悶していたからであり、そこに高見の分裂した自我の彷徨があった。高見の言動に、日本の南進政策に連動していた側面があったにしても、それは、内向する自己分裂的な文学から脱し、「社会と共に呼吸し歩むところの動く遅い文学」を希求していたからである。しかし、戦時下において、新しい人間像の文学を積極的に創造していこうとした時に、自分たちを取り巻く社会や国家、そして世界と如何に関わっていけばよかつたのか、高見の文学的苦悶を見る際、考えさせられる問題であろう。しかも、それは、高見のみならず、戦時下において、主体的に新しい文学を創造しようとしていた横光利一など他の同時代作家にも通じている問題だと思われるのである。

## 註

- (1) 平野謙編『現代日本文学論争史』下巻、昭和三十三年一月、未来社。
- (2) 『吉田満著作集』下巻 昭和六一年九月、理想社、二六頁。
- (3) 「独人抑留、敵産処分 蘭印総督、参議会で演説」の記事、参照。
- (4) 『東京朝日新聞』昭和十五年五月一二日の記事「蘭印の現

状維持確守、改めて各国に申し入れ〈閣議決定〉外相より通告す」参照。

- (5) 『東京朝日新聞』昭和十五年六月五日の記事「スラバヤの現状打診 極端に日本を警戒 邦人に差別的扱ひ」参照。
- (6) 『東京朝日新聞』昭和十五年七月一二日の記事「蘭印東印度資源の全貌 開発を待つ埋蔵資源 ゴム・規那は、手販売」参照。「支那人」約百二〇万人、オランダ人は二〇万人、欧州人と日本人合わせて二五万人、「土着民」は五千九百万人。

- (7) 『河上徹太郎全集』第八巻 昭和四七年一月、勁草書房、二五七頁。

- (8) 当時、蘭印をめぐる政治的経済的な問題についての議論も盛んで、その論の幾つか列挙すれば次のようなものがある。

井上雅二『南進の心構へ』昭和六年五月、川江書院  
山田文雄「蘭印周辺を繞る諸条件」昭和五年七月『中央公論』  
座談会 大宅由歌・小島精一・斎藤文也・下田文一・永田安吉・西原龍夫・牧悦三・宮原武雄「南進国策の新展開」昭和五年八月『文芸春秋』

高橋三吉「我が南進策と米國」昭和十五年一月『改造』  
和田敏明「蘭印交渉の前途」昭和十五年二月『改造』  
また、「蘭印の印象」と同時期、『改造』（昭和六年六月）において、平貞蔵、山田文雄、板垣与一の三人が「南方圏の現実」というタイトルで鼎談。

- (9) 斎藤は「私達はオランダ人の植民地とは思つて居らない、オランダ人の搾取場であると考へて居るのです。さうして土人の如きに対しては、昔の習慣通り着物を着るな、跣で歩け、さうしてちつとも教育を与へず、靴も穿かせない。」と発言している。

- (10) エドワード・W・サイードは、「オリエンタリズム」（一九七八年刊／今沢紀子訳、平成五年六月初版、平凡社ライブラリー）において、「オリエンタリズム」とは、「オリエントを支配し再構成するための西洋の様式（スタイル）」（上巻二頁）であり、「我々の世界と異なっていることが、目瞭然であるような（あるいは我々の世界にかわりうる新しい）世界を理解し、場合によっては支配し、操縦し、統合しようとする一定の意志、または目的意識——を表現するものというよりはむしろ——そのものである。なによりも、オリエンタリズムとは、言説である。」（上巻四〇頁）としている。パリー・ホテルの料理の献立

表（英語と「和蘭語」で印刷）に書かれたようなバリーの神話や絵も、野崎の見方によれば、外国人観光客にバリーを夢想的、怪異的に見せるべく演出されたオリエンタリズムの産物である。

- (11) 昭和十六年七月二十九日『読売新聞』夕刊「蘭印、対日貿易抑圧全面許可制布く 資産凍結もけふ実施」／七月三〇日『東京朝日新聞』夕刊「昨年の日蘭石油協定 蘭印、突如停止を発表 相次ぐ措置に成行重視」／八月二三日『東京日日新聞』「蘭印の排日今や極点 邦人見ればスバイ嫌疑 不法にも本社特派員に退去命令 我が地盤壊滅の危機」／九月二四日『東京朝日新聞』「蘭印から千名」裸”で帰る”等の記事参照。

- (12) 「私小説と庶民小説」（上）昭和十六年五月二八日、「万人の分身へ 私小説と庶民小説」（下）昭和十六年五月二〇日『読売新聞』引用は（下）の最後の部分。

- (13) 石川達三は、南洋群島の風物を紹介するため、海軍省と情報局の幹旋で、他の作家、画家とともに、力月程の視察に出掛けている。

- (14) （一）の平野謙編『現代日本文学論争史』下巻参照、二〇六～二〇九頁。

【付記】高見の作品は、筑摩書房版『高見順全集』全二巻（昭和四五年二月～昭和五二年九月）を参照、引用もそれに拠る。